

新規採用者からの メッセージ

全てが新しい場所での 意気込み

生産基盤研究領域

兒玉 異 (こだま たつみ)



はじめまして。この度、生産基盤研究領域の作業技術グループに研究職として配属されました。出身は北海道で、大学院の2年間で鳥取県で過ごし、また寒い地域に戻ってきました。住んできた北海道や鳥取、趣味の旅行などで、いろいろな地域を

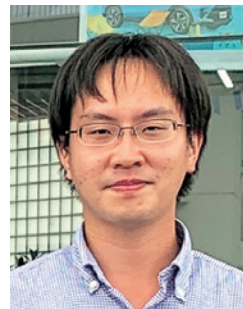
見てきましたが東北も独特の文化と雰囲気があるように感じました。まだまだ東北で見えていないものも多く、これからどんなものが見られるのか、ワクワクしています。特に盛岡のじゃじゃ麺、冷麺、蕎麦の麺文化や、宮沢賢治や石川啄木を輩出した風土に興味があります。

今後、担当する研究は大規模露地野菜栽培における作業の機械化、乾田直播による稲作機械体系の普及と改良などの課題です。農業従事者の高齢化や減少が進行していますが、野菜の栽培は機械化が進んでおらず、いまなお生産には多くの労力を必要としています。東北の農家、さらには日本の農家の方々が広い田畑をより効率よく、労力を減らして作業できるような機械やシステムを構築することを目標とし、現場における多くの課題を解決できるようにと意気込んでいます。大学院では、コムギの遺伝子と種子発芽の関係性に関する研究をしておりました。農業機械に触れた経験はあまり無いので、研究分野、対象作物が大きく変わり、見るものすべてが新たな視点となります。まだまだ勉強不足な部分も多いですが、先輩研究者、職員、農家、企業の方々から、早く一人前の研究者として認められるように精進していきます。どうぞよろしくお願いいたします。

“現場主義”を忘れない 研究者へ

農業放射線研究センター

木幡 裕介 (こわた ゆうすけ)



令和2年6月、農業放射線研究センター営農再開グループに着任いたしました。担当する研究は、福島第一原子力発電所事故後除染を行った水田輪作畑の営農再開において課題となっている、除草管理が難しい雑草種に対する除草管理システムの確立

です。雑草を対象とした研究は初めてですが、福島第一原子力発電所事故後の営農再開に関する研究は大学院卒業まで携わりました。この研究において、研究成果を農業者に利用いただくことを通して達成感を得たことから、“現場主義”という考え方を信条に、研究職に進むことを決意しました。

卒業研究は、福島県二本松市東和地区において、地域特産物である桑の葉に対する放射性セシウム吸収抑制法の検討でした。東和地区の桑葉生産者のご理解をいただき、桑葉や土壌を研究試料として採取することができ、現地農業者の協力無くして研究は成し得ないことを実感しました。加えて、試料採取日以外にも研究指導教官を通して研究対象地区を頻りに訪問し、東和地区における研究成果報告会等の取り組みを通して、情報交換を積極的に行いました。これにより農業者が独自に実施している農法があること、農地内における養分の偏りや日照条件、農地内に強い傾斜が存在するなどの特徴があることに気づきました。これにより、自己の研究内容は多様な現場環境で利用可能な農法を提案するに足りる内容か、農業者に抵抗なく活用していただけるのかなど、自己の研究を省みる機会になるとともに、見聞を広げることにもつながりました。研究成果を通して消費に安全な桑葉の生産が可能となり、地域の桑葉加工工場を再開することができました。

この経験を通して培った“現場主義”の大切さを忘れることなく、研究に取り組んでいきます。